

# 『グリム童話』と『初版グリム童話』

岩本 祥

東京大学 理学系研究科 物理学専攻 (柳田研)

2008年8月31日

## 1 はじめに

今学期の講義では、私たちは Grimm 兄弟が彼らの “Kinder- und Hausmärchen” をどのように作り上げていったのか、Ölenberg 稿から初版、第 2 版と版を重ねる中で、どのような修正を加えていったのか、という点に主眼をおいて、

- Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich : Ölenberg 稿・初版 (1812)・第 2 版 (1819)・第 3 版 (1837)・第 7 版 (1857) \*<sup>1</sup>
- Das Mädchen ohne Hände : 初版 (1812)・第 2 版 (1819)・第 7 版 (1857)

の 2 つの物語について、それらの各版を読み比べた。

「グリム童話」は、言うまでもなく非常に有名な童話集である。例えば『白雪姫』や『シンデレラ』、『ヘンゼルとグレーテル』などは日本人なら誰でも知っている物語であろう。いくつかの作品は Walt Disney によって映画化<sup>\*2</sup>され、世界中で親しまれている。

ところが、今から 10 年ほど前に『本当は恐ろしいグリム童話』という本が発売され、話題となった<sup>\*3</sup>。『シンデレラ』や『白雪姫』は、Disney の映画などで広く知られているようなものではなく、もともとはずっと残酷な物語であった、そして現在知られている話は後に子供向けに書きなおされたものである、というのだ。

ではなぜ、Grimm 兄弟は彼らの「童話」に残酷な描写を残したのだろうか。それとも、彼らの書いた “Kinder- und Hausmärchen” は子供向けの童話ではなかったのか？ あくまでも “Märchen” であり、大人向けの文学作品だったのか？ 私はかねがねそのような疑問を抱いていた。

このような疑問を持ちつつ望んだこの講義の過程で、私は以下のようなことが気になった。

- Ölenberg 稿から最近の版に至るまで、暴力的な描写は修正されていない。なぜ彼らは Kinder- und Hausmärchen にこのような暴力的な描写を残したのか。
- Grimm 兄弟が実際に為した改変にはどのような種類があるか。そのような改変を行った理由は何か。
- どちらの作品も、初期の頃は情景描写・心情描写などが貧弱であり、“Kinder” の読む「童話」であるようには到底思えない。“Kinder- und Hausmärchen” は、いったい誰のため・何のために出版された本なのだろうか。

この文章では、これらの疑問について私が考えた・調べたことを述べる。

\*<sup>1</sup> はっきりとは覚えていないけれども、確か第 7 版だったはず……。

\*<sup>2</sup> “Snow White and the Seven Dwarfs”(1937)・“Cinderella”(1950)・“Sleeping Beauty”(1959) の 3 作品 [1, 3]。

\*<sup>3</sup> 桐生 操 『本当は恐ろしいグリム童話』(1998年6月, ベストセラーズ) [4]

## 2 Brüder Grimm

まず初めに、Grimm 兄弟とはどのような人物であるか、特にどのような方向に興味を持っていたかを調べることにした。特に、“Kinder- und Hausmärchen” の出版の頃までの彼らの歩みを以下にまとめてみた。<sup>[1, 2]</sup>

### 出生と両親

- Jacob は 1785 年、Wilhelm は 1786 年に、Deutschland 南西部の Hanau で生まれた。1791 年に Steinau、さらに 1798 年に Kassel に引っ越す。
- 父親 (Phillipp Wilhelm Grimm) は法律家で、Steinau では行政司法官を務めた。
- 2 人とも、Calvin 派の改革派教会で厳しい宗教教育を受ける。
- 1796 年に父親が死去し、経済的に困窮する。

### 大学時代

- それぞれ 1802 年・1803 年に Lyceum を卒業し、Philipps Universität Marburg に入学して法律学を学ぶ。
- Jacob は 1805 年、Friedrich Carl von Savigny と共に Roma 法制史研究の助手として Paris に旅立つ。この頃、Savigny の「歴史的」な邦楽研究の手法に感化され、法学研究をやめて Deutschland の古い文献の研究に専心する決心をする。
- Jacob は、大学卒業後は陸軍省の書記補や図書館の司書などの仕事をしつつ、古い文学と慣習の研究を続ける。
- Wilhelm は大学卒業後、Kassel に戻る。

### Kinder- und Hausmärchen

- 1806 年頃から、兄弟は Märchen の収集を始めた。
- 1810 年に、収集した Märchen のうち 49 話の原稿を Clemens Blentano に貸すが、Blentano は遺失する。(Ölenberg 稿)
- 1812 年、『Kinder- und Hausmächen』初版を出版。
- Jacob は、1814 年から外交官として Paris と Wien で働く。
- Wilhelm は図書館書記の仕事の傍ら Kinder- und Hausmärchen の執筆を続け、1815 年に第 2 巻を出版する。

ところで、彼らの志向性を見るには、彼らがどのような本を書いたかを調べるのも有効である。彼らの主な著作は、以下の通りである<sup>[1, 5]</sup>。

### 共著

- Die beiden ältesten deutschen Gedichte aus dem 8. Jahrhundert: Das Lied von Hildebrand und Hadubrand und das Wessobrunner Gebet
- Kinder- und Hausmärchen
- Deutsche Sagen
- Deutsche Mythologie
- Deutsches Wörterbuch

### Jacob Grimm

- Über den altdeutschen Meistergesang
- Deutsche Grammatik
- Deutsche Rechtsaltertümer
- Geschichte der deutschen Sprache
- Deutsche Weistümer

### Wilhelm Grimm

- Über deutsche Runen
- Altdänische Heldenlieder, Balladen und Märchen
- Die deutsche Heldensage
- De Hildebrando antiquissimi carminis teutonici fragmentum
- Vridankes Bescheidenheit
- Der Rosengarten
- Ruolandes liet

最初に目を引くのは、彼らは元々は童話作家のような「話を作る人」ではなく、学術的に「話を収集する人」だったということである。特に Jacob についてはそれが顕著であり、彼の著作には物語や文学についてのものはほとんど見当たらない。むしろ言語や法律、慣習などへの強い興味が窺える。Wilhelm もやはり、元々は法学志向であった。ただし彼の場合は、特に 1830 年頃以降は文学についての著作を多く著している。おそらくこの頃には、彼の興味は専ら文学にあったのだろう。

また、彼らは（意外にも）貧乏であった。父親の存命中は裕福な暮らしをしていたが、死後経済状況が悪化し、特に 1802 年～1814 年頃には非常に困窮していた。「グリム童話」の現在の人気ぶりからは想像出来ないことである。

以上のことから鑑みるに、“Kinder- und Hausmärchen”を改訂し、より親しまれる形へと変化させていったのは Wilhelm の方であろう。第 2 版は 1819 年、第 3 版は 1837 年であるが、この頃 Wilhelm は文学に関する著作を多く出版している。健康状態も良好だったのであろう。ちなみに Jacob が“Deutsche Grammatik”を執筆していたのもこの時期である。

では、その改訂に対して Jacob はどう考えていたのか。講義でみたような劇的な改訂は、兄弟の合意の下で行われたのか、それとも Wilhelm の独断だったのか。

往復書簡集などが出ていないかと期待したのだが、残念ながらこの頃は Jacob は Wilhelm の許に居たのでそのようなものは残っていなかった。しかし、Zipes<sup>[1]</sup>によると、

全体の調子を決めたのは Jacob だが、話をどのように変えて形を整えるかについて、2 人の意見はほとんど一致していた。そのことは強調しておく必要がある。というのも、Jacob と Wilhelm の間には大きな意見の食い違いがあったとする研究者もいるからだ。

とのことである。もしかしたらこの部分については現在もよくわかっていないのかもしれないが、まあ素朴に考えれば、彼らは一緒に暮らしていたのであるから、少なくとも深刻な対立は無かったのではないかと、という気がする。

### 3 彼らは何をどう改訂したのか？

次に、Grimm 兄弟が実際にどのような改訂を行ったのかを、本講義で扱った 2 つの物語を題材にして見ていくことにする。以下では、例えば『“Das Mädchen ohne Hände” の第 2 版と第 3 版における変更』を《Mädchen-2:3》などのように略記する。

#### 3.1 全体に共通すること

まず見てとれるのは、物語をより親しまれやすい形にしようとした、という点である。つまり

- 状況や心情の描写をより細かくする。あるいは膨らませる。
- 登場人物のしゃべり（会話）を増やす。

などである。《Froschkönig – 2:3》の冒頭は「状況描写の精密化」の好例であり、第 2 版ではヒマなお姫様がいきなり登場しているが、第 3 版では王、王女、城、森、泉という「舞台」の説明に 1 段落を費やしている。城に来たカエルに対する怒りの描写も、第 3 版では第 2 版に比べて充実している。会話の挿入は至る所で見られ、特に Ölenberg 稿から初版への段階で顕著であるが、初版以降では、例えば《Mädchen – 2:7》の末尾で王のセリフが 1 つ追加されているし、《Froschkönig – 1:2》でも蛙と一緒に寝ることを嫌がる王女に対する王のセリフが追加されている。

また、物語を「書かれた物語」から「語られた物語」へと変える工夫も随所に見られる。具体的には

- Märchen らしい言い回し（語り口）を付け加える。
- 子供の好む表現を付け加える。
- Komma の位置を調整して話しやすい形にする。

という手法である。特に《Froschkönig – 2:3》の冒頭，“wo das Wünschen noch geholfen hat,” は、これぞまさに Märchen ,といった語り口である。また、《Froschkönig – 2:3》では、王女が泉で蛙のことを“Wasserpatcher”と呼ぶ描写が付け加えられているが、これもやはり「読み聞かせられた物語」を意識してのことであろう。

#### 3.2 DER FROSCHKÖNIG ODER DER EISERNE HEINRICH

では次に、これまでに挙げたような体裁上の変更ではない、もう少し本質的な部分の変更へと入って行こう。

最初に，“Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich” について見る。初版以降の各版を比較してみると、中盤までは物語としては同じである。しかし、王女が蛙を壁に叩きつけた後の部分ではいくつか顕著な変化が見られる。

叩きつけてから翌朝までの部分について、各版を比較してみよう。

- 落ちてきたのは
  - 1 > Aber der Frosch fiel nicht **todt** herunter,
  - 2,3 > Was aber herunter fiel, war nicht ein **todter** Frosch,
  - 7 > Als er aber herabfiel, war er kein Frosch,
- ではなく、実際には
  - 1 > sondern wie er **herab auf das Bett kam**, da wars ein schöner junger Prinz.
  - 2,3 > sondern ein lebendiger, junger Königssohn.

- それから

1 > sie hielt ihn werth wie sie versprochen hatte,

2,3 > Der war nun von Recht und mit ihres Vaters Wille ihr lieber Geselle unt Gemahl.

7 > Der war nun nach ihres Vaters Willen ihr lieber Geselle unt Gemahl.

- 実は

1-3 > (記述なし)

7 > 魔女に魔法をかけられた。魔法を解けるのはあなただけだった。

さて、この中で最も大きな違いは、3 番目である。初版では、何となく意味深な感じで書かれてある。王子は“auf das Bett”に落ちてきた、ということも考えると、(王女の年齢次第ではあるが)性的関係を暗示していると言えるだろう。

ただし今回は、そのような部分(あるいは Bett に落ちてきたところでどうして王子の姿に戻るのか、という至極当然な疑問)ではなく、この部分を Grimm 兄弟は削除したという点に注目する。Grimm 兄弟は《1:2》においてこの部分を削除する代わりに「この結婚は当然の結果であり、また王の意志によるものだ」という記述を強引に付け加えた。また、《3:7》では“von Recht”という表現の代わりに、もう少し物語の展開を明瞭にするため「王女と結ばれるのは魔法をかけられた段階で運命づけられていた」という部分が付け加えられた。すなわち Grimm 兄弟は

- 性的関係を暗示する部分を削除した。
- 結婚は王の許可の下で行われたもの、あるいは最初から運命づけられていたものである、とした。

のである。

今回の講義では、この物語については Ölenberg 稿も取り扱った。Ölenberg 稿と初版とを比較することで、この物語の原型に近づくことにしよう。

Ölenberg 稿と初版との(装飾以外の)主な違いは

- 題名
- 王女と蛙の約束の中身
- 先ほどの「夜」の部分の描写

の3点である。

まず、約束についてであるが、初版以降では約束の内容は「友達(恋人)になって、隣に座って食事をして、一緒に寝る」というものである。一方 Ölenberg 稿では「家に連れていく」となっている。

次に夜の部分について比較すると、

- 王女は蛙を

Ö > wieder die Wand in ihrem Bett

1 > an die Wand

- に叩きつけた。そうしたら

Ö > fiel er herunter in das Bett und lag darin aus ein junger schöner Prinz.

1 > sondern wie er herab auf das Bett kam, da wars ein schöner junger Printz.

- それから

Ö > (記述なし)

1 > sie hielt ihn werth wie sie versprochen hatte, und sie schiefen vergnügt zusammen ein.

となっており、Ölenberg 稿では王子が“lag darin”した後のことは何も書かれていない。元々は性的関係（の暗示）などは無かったのだろうか。

まず、約束の内容が変化していることについては、後の展開と合うように Grimm が膨らませた、と考えられる。（Ölenberg 稿でも、王女は蛙と食事をして一緒に寝て恋人になる。）しかし、「家に連れていく」という約束なのに、“ich will bei dir schlafen”と要求するのはやや厚顔な気がする。

これらは、次のように考えることで解決することができる。まず、この話の原型とも言える話が大昔に存在し、その話の中では「一緒に寝る」ということが魔法を解く鍵であった。もちろんそこには性的関係の暗示が存在している。そしてその話が口承で広まっていくにつれて、いくつかの変化が生じた。約束が「家に連れていく」と簡略化されたのはその過程の1つである<sup>\*4</sup>。また、Heinrich の部分はこの過程で別の物語と融合した結果なのかもしれない。そして Grimm 兄弟は Märchen を収集していく上で、この話のいくつかの類話に出会った。初版にあった“sie hielt ihn werth wie sie versprochen hatte”という記述は、他の類話から取ってきたものである。このような過程を経た結果、王女と蛙と Heinrich という主人公が3人もいるごちゃごちゃした話が仕上がり、また Ölenberg 稿にあるような厚顔な蛙が生まれたのであろう。

### 3.3 DAS MÄDCHEN OHNE HÄNDE

さて、既にだいが長くなってしまったが、しかしもう1つの“Das Mädchen ohne Hände”についても書かねばならない。

“Das Mädchen ohne Hände”は、第2版と第7版の間には（装飾的なものを除けば）違いは殆ど無い。しかし、初版と第2版との間には、同じ話とは思えないほどの違いがある。娘が家を出て王の庭を見つけるまでは同じなのだが、それ以降が全く異なっているのだ。初めにそれを整理しておこう。

- 王の庭に入る場面では
  - 1 > 庭の垣根には割れ目があり、そこから娘は入っていく。
  - 2 > 月光により中に沢山の果樹があるのが見えるが、庭の周りには堀があって入れない。娘は空腹に耐えられず、跪いて神に祈ると、天使が現れて水を止めてくれ、庭に入ることが出来る。
- 庭に入った娘は
  - 1 > 木を体で揺さぶり、落ちたリンゴを歯で拾って食べた。これを2日続けた。
  - 2 > 木からナシを1つだけ口で取って食べた。その様子は番人に見られていた。
- 発見される娘。
  - 1 > 3日目に番人が彼女を見つけ、牢屋に入れられ、翌朝国外追放を命じられる。
  - 2 > ナシはみな数えられており、1つ減ったことに気づいた王様が番人を追及する。番人は「手のない幽霊が天使と共にやってきて食べた」と言うので、その晩に王様と番人と祭司とで庭を見張ることにする。娘はまたやってきてナシを1つだけ食べ、発見される。
- 妃になる場面。
  - 1 > 王子が、国外追放の代わりに庭で鶏番をさせてはどうかと提案する。娘は鶏番をすることになり、そして王子は娘が好きになる。王子が結婚する段になり、美しい花嫁が見つからず、また王子は娘以外とは結婚しないと断ったため、娘は王子と結婚する。王は死に、王子は王位を継承する。
  - 2 > 娘は綺麗で信心深かったので、王様は惚れ、銀の腕をつくってやり、妃にする。
- 娘が子供を産んだことを、出兵中の王に知らせる。
  - 1 > 娘が自分で手紙を書く。

<sup>\*4</sup> 家に連れていくことが魔法を解くカギであったなら、わざわざ一緒に寝るような展開にはなりえなかっただろう。

- 2 > 年老いた母親が王に手紙を書く。
- すり替えられた王の返事は
  - 1 > 妃を子供と一緒に国外追放するよう命じる。
  - 2 > 妃と子供を殺すよう命じる。
- 王の返事に対して
  - 1 > 城じゅうが悲しむ。娘は子供と共に外に出て行く。
  - 2 > 母親は信じられずにもう一度手紙を書くが、やはり返事は変わらない。更に娘の舌と目をとっておくようにも書いてある。そこで母親は代わりに鹿の舌と目玉をとっておき、娘を外に逃がす。
- 森に入った妃は
  - 1 > 森の深くの泉で老人に会い、老人の助けの下で子供に授乳する。更に老人の言うとおりに木に手を3回巻き付けると、手が再び生えてくる。老人に指示された家に行き、そこで彼女は暮らす。老人は彼女に「3度神に誓って頼まれない限り、扉を開けるな」と命じる。
  - 2 > 神に祈ると天使が現れ、天使は森の中の家へと導く。家では別の天使が待っており、そこで妃は7年間お世話される。
- 戦場から戻ってきた王は
  - 1 > 一人だけ家来を連れて妃を捜しに出かける。長い旅の果てに王は森の中を彷徨い、家を見つける。
  - 2 > 一切飲み食いをせずに（神の加護の下）7年間妃を捜し続け、ようやく小さな家を見つける。
- そして
  - 1 > 王は休まず捜索を続けたかったが、家来が休みたがったために休むことにする。家来はその小さな家に泊めてもらうよう頼むが、聞き入れられない。王が3度頼むと、妃は扉を開ける。王はすぐに妻だと気づき、城に戻って幸せに暮らす。小さな家は彼らが外に出て行くと、消えた。
  - 2 > 天使に中に入れられ食事を勧められるが、王は断り、少しの間眠る。天使は妃と子供を連れてくる。最初は王は気づかないが、色々あって妻と子供だと気づく。そして城に戻り、幸せに暮らす。

このような具合に、全く違う話となってしまうている。《Mädchen – 1:2》におけるこれらの相違点は、

- 初版に見られる（老人や木などの）神話的・超自然的な色彩が薄れ、宗教的な話になっている。
- 娘の行動がより淑やかになっている。（果物を食べる場面）
- 残虐な部分が増えている。（舌と目玉を取っておく）

という3点に要約することができるだろう。

しかし、これらは Grimm 兄弟によって創作されたものではないと考えられる。というのも、まず第一に、Grimm 兄弟は Kinder- und Hausmärchen **第2版**の序文<sup>[2]</sup>において、

こうした口承の話に学問的価値を認めるなら、すなわち、こうした話のなかに過去の考えや形式が保持されていると認めるなら、その価値は、話に手が入れられたとたんに、かならずと言っていいほど失われてしまうことは目に見えている。

と述べている。また、この“Das Mädchen ohne Hände”という話には、世界中に非常に多くの類話が知られている。この2つのことから考えると、この《Mädchen – 1:2》は、Grimm 兄弟による内容の変更というよりは、「初版での話を、第2版では別の類話に置き換えた」として考えるのが妥当であろう。

ではなぜ Grimm 兄弟は、初版にあった話を、第2版以降で見られる話で置き換えたのだろうか。“Froschkönig”で見られた変更点も含めて、この「改訂の理由」について次節では考えていこう。

## 4 彼らはなぜこのような改訂を行ったのか

まず、Zipes によれば<sup>[1]</sup>

事実、1812 年と 1815 年に出版した 156 話からなる 2 巻本において 2 人がなし遂げたことは、何よりも、文学的おとぎ話の理想像を創作したことである。すなわち、口承伝統にできるだけ接近しつつ、台頭しつつあった bourgeois の読者に受けるように、文体にも形式にも実質的 theme にも変化を加えたのである。(P.24)

Grimm 兄弟は編集に際して話を大きく変えた。中産階級の道徳律に反するような、erotic な要素や性的な箇所を取り除き、Christ 教的な表現や要素をたくさん付け加え、主人公を書く際には、彼らの時代に支配的だった父権主義的な規範に従って、男女の役割分担を強調し、また指小辞をつけたり、古風で趣のある言い回しをしたり、気の利いた描写をしたりして、多くの話に「家庭的な」雰囲気、すなわち Biedermeier 風の味わいを添えたのである。《中略》更に、童話集ははじめは子どもの読者を対象にしていたわけではなかった—最初の 2 巻本には学術的な註釈がついていて、これは後の版では別冊になった—けれども、Wilhelm は、1819 年以降のすべての版について、より子どもに相応しくなるように、というより彼の目から見て子どもに聞かせるに相応しいと思えるように、書き直した。(PP.27-28)

とある。

また、Tatar は Kinder- und Hausmärchen について

当時の価値観に終始染まり、教育的であるようにとの要請にますます敏感になっていった Grimm 兄弟が、おとな向けの話の素材を、民間伝承と文学の混成物にし、子ども向けに変成させていった

と考えている<sup>[2, P.24]</sup> らしく、著書<sup>[2]</sup> の中では

Grimm 兄弟が、悪者たちが受ける罰の残酷さを和らげたり、物語から痛みや苦しみを削除するということはまれだった。またそうした変更をするにしても、たいていは彼ら自らの意志というより、友人や同僚たちの勧めによる場合のほうが多かった。Grimm 兄弟はむしろ、つとめて暴力的な episode を挿入したり、強調したりしている。(P.33)

Grimm 兄弟にとって、暴力よりずっと我慢のならなかったもの、そして用心深く手直しする過程でできるかぎり童話集から削除したものは、彼らが遠まわしに、「ある状態とある関係」と呼んでいることがらである。なかでも彼らがいちばん神経をとがらせたある状態とは、妊娠だったようだ。(P.36)

妊娠は、“Hans Dumm”にあるようなばかげた願いの結果であろうと、“Der gelernte Jäger”にあるような不義の結果であろうと、Grimm 兄弟を不愉快にさせる theme だった。婚前交渉のかすかな気配でさえ、とくに Wilhelm Grimm を困惑させ、赤面させたに違いない。“Der Froschkönig, oder der eiserne Heinrich”にざっと目を通してみれば(童話集の第 1 話として収められているので、いちばん目立つのだが)、物語のなかの民話的事実を隠蔽するために、Wilhelm がどんな策を用いたかがよくわかる。(P.37)

初版では、カエルが Bett の上に落ちるといふ箇所は手付かずのままになっているが、王子の姿にもどったカエルは、王女の「だいじな友達」となり、「お姫さまは約束どおり、王子にやさしくする」ものの、すぐにふたりは「おとなしく眠ってしまう」。第 2 版では、Wilhelm Grimm は、カエルの王さまが落っこちる場所から Bett を取り除き、カエルは壁にたたきつけられたとたんに王子の姿に変わる、と

いう表現にとどめている。この話では、しあわせなふたりは結婚の誓いを交わしてはじめていっしょに寝ているし、誓いを交わす前には王女の父親の承諾を得ていることもはっきりと書かれてある。(P.37)

グリム兄弟が気に食わなかったか、あるいは少なくとも、彼らの童話集のテーマにふさわしくないと考えたと思われるもうひとつの「状態と関係」は、近親相姦と近親相姦的欲望である。

《中略》

ひとつの物語にいくつかの類話がある場合、Grimm 兄弟はつねに、近親相姦的な欲望と、Ὀιδίπους complex 的な危険な結びつきが表面に出ていないものを選んでいく。“Das Mädchen ohne Hände” の text の推移をみると、自分の娘に下心をもつ父親を描いた物語に、Grimm 兄弟がいかに神経質に気を配ったかがわかる。この物語が初めて Grimm 兄弟の目に泊まった時、それは次のようなものだった。

《中略》

Grimm 兄弟はその後この物語のいくつかの類話に出合ったが、なかにひとつ、ずば抜けて優れたものがあつたと述べている。彼らは、この類話のつじつまの合った一貫性に心動かされ、ぜひこの物語を“Kinder- und Hausmärchen”の初版のものに入れ替えたいと思った。だがこの新たな「ずば抜けて優れた」類話も、冒頭の部分については、初版にくらべて娘の旅立ちの動機は明確で論理にかなっているとはいえ、どうしても Grimm 兄弟の好みに合わなかった。つまりこの話では、娘は理由なしに自分の意志で家を出ていくのではなく、父親に結婚をせまられ、拒んだために両手と両乳房を切り取られてしまい、それで家を出るのだ。この類話には悪魔は登場せず、少女の父親が唯一、悪魔的な人物となっている。結局、Grimm 兄弟は、text のつじつまの合った一貫性を称賛しながら、この text を切断して、そこに再び悪魔をつめ込むことなど簡単だと考えた。こうして、父親の罪を詳細に描いた導入部は物語から削られ、悪魔との契約という、あまり衝撃的でない話に置き換えられた。

《中略》

近親相姦は、彼らが童話集の序文で講えた、完全に自然なことがらとはまさに相容れないものだったのだ。(PP.38-40)

と書かれてある。これらの本に殆ど答えが書かれているようで何となく恐縮ではあるのだが、つまりそういうことなのだろう。

まず、“Der Froschkönig, oder der eiserne Heinrich”に見られる変更について。性的関係を暗示している部分は、まさに（王の許可が無いために）婚前交渉である。Grimm 兄弟は、それが**当時の宗教的価値観・道徳観に悖っていたため削除・変更された**。特に（娘の部屋の場面だったのに）突然“mit ihres Vaters Wille”などが挿入されているのは、それ以外の何物でもないだろう。また、第7版で『運命づけられたような記述』が為されているのも、一つには**話をより神秘的・Märchenらしくする**という意図があつただろうが、その（**性急な）結婚を正当化するため**という理由も含まれているだろう。

次に、“Das Mädchen ohne Hände”の中の変更点であるが、これは Tatar の言うそのままであろう。即ち、Grimm 兄弟の最初に見た話、或いは比較的よく知られている話では、娘は**何となく家を出る**。もちろん家を出なければお話は始まらないので、das Mädchen は何とかして外に出なければならぬのだが、口伝の物語ではそこまで論理性は担保されないのだろう。そして、別の類話では、家を出て行く理由として\*<sup>5</sup>**近親相姦の話**を見つけた。また、最初の話では後半部分は**神話的・超自然的**であつたが、**宗教的な類話**というのも彼らは見つけたのだろう。このようないくつかの類話を Grimm 兄弟は睨んで、そしてそれらを組み合わせると第2版に見られる**何となく家を出る**、**宗教的な話**が出来上がったと考えられる。

\*<sup>5</sup> 元々が近親相姦の話で、その部分が後に消えていったのか、或いは元々は何となく家を出て、後に近親相姦だとする尤もらしい説明が加わったのかについてはここでは考えない。

いずれにせよ、Grimm 兄弟は大きく言って

- 当時の宗教的価値観と道徳観に基づくように

という価値判断の下で、

- 話の内容の細かい微調整を行う
- 類話を比較し、継ぎ接ぎする

という作業を行ったのだろう。

Grimm 兄弟は、Kinder- und Hausmärchen の初版の序文の中で<sup>[2]</sup>

われわれはこれらの話をできるかぎり純粋なかたちで集めることに努めた。多くの話は、同韻語や詩句によって話の流れが遮られる。これらの詩句は、ときにははっきりと頭韻を踏んでいるが、物語られるあいだはけっして歌われることはない。つまりこれらの詩句はまさしく最古で最良の話なのだ。話の枝葉末節まで何ひとつ付け加えたり、変更してはいない。というのは、すでにこれほど豊かな story に、類比やほのめかしを付け加えて膨らましてしまうのは気が進まなかったからだ。(初版第1巻)

口承の話などでたらめにきまっているとか、念を入れて保存していないだろうとか、長い語りはたいていは無理だろう、と思いついていて人には一度、Viehmann がそれぞれの話をいかに正確に覚えていて、正確に語ることに熱心か、聞く機会をもっていたきたい。(初版第2巻)

と、その正確性について自信を持っており、

われわれの童話集のねらいは、詩の歴史の拠り所として役立つことだけではない。童話集に含まれる詩が印象深く、どんな場合も喜びをあたえ、したがって童話集が教育の書となることがもうひとつのねらいである。この意味で、話のなかには困惑するものがあるかもしれない、《中略》また親はこの本をすっかり子どもの手には委ねたくないかもしれない《中略》ただし全体としてそんな懸念はまったく無用だ。自然そのものがわれわれの最良の証人だからである。(初版第2巻)

と、「ちょっとぐらい道徳に反していても、自然選択の結果残ったものなのだから十分に教育の書となる」と述べている。この部分は第2版でも一貫しており、

この童話集全体を、まず第一に詩と神話の歴史の拠り所として役立たせるだけでなく、このなかに含まれる詩が印象深く、どんな場合も喜びをあたえられるように、更に教育の書として役立つようにするのが、われわれのねらいなのである。そのためにわれわれが求めているのは、日常生活のなかで起こり、しかも隠しておくことなどできないようなある種の状況や関係にかかわることをすべて、狭い心で削り取ってしまうことによって得られる純真さではない。《中略》われわれが求めているのは、悪いことを消し去って隠すようなことをしない、ごまかしのない話の真実のなかにある純真さなのだ。(第2版)

と述べているが、しかし Grimm 兄弟は初版とは違って、その直後に

とはいえ、この新版では、子どもにふさわしくない表現はすべて注意深く削除した。

という一言を挿入している。その上で、初版と同じように

それでもなお、二、三の話が親を当惑させる、あるいは不快な気持ちにさせるとか、そのためにこの本

を子どもに直接渡したくはないというような強硬な意見が出てくるかもしれない。こうした懸念は場合によってはもっともであり、そういう場合は話を選んであたえてくださればよい。ただし全体としては、つまり健康な状態の場合は、こうした懸念はまったく不要だ。自然そのものがわれわれの最良の証人だからである。《中略》自然なものは何であれ健全なものであり、それこそがわれわれのめざすべきものなのだ。

と続けている。おそらく、「狭い心で削り取」らなかったものは、性交および妊娠、および暴力的表現のことであろう。また、「子どもにふさわしくない表現」というのは、**残虐な表現ではなく**、具体的には例えば**近親相姦および婚前交渉**であろう。

Grimm 兄弟は、特に初版については、主に学術的な興味から、できるだけ元々の形に近いものを載せようとした。しかし、おそらく（当時はすでに一般の人々が本を読む文化があったとのことであるから）その初版は一般の人の手にも渡り、そして「残虐すぎる」「けしからん」などの苦情が来たのだろう\*6。もちろん彼らも折角出版したのだから人気を得たかったし賞賛されたがっていただろうし、更に印税はとても欲しかったはずだ。また、Grimm 兄弟は子供の頃に厳しい宗教教育を受けているため、宗教的にも厳格だったと考えられる。そうした中で、第2版以降は大衆ウケするような、宗教観・道徳観に適った方向へと転換したと考えられる。

## 5 まとめ

- Grimm 兄弟が暴力的な描写を残したのは、それらが当時の宗教的価値観・道徳観に深刻に反しておらず、また物語が口伝される間にそのような描写が消えなかったことを重く見たからである。
- Grimm 兄弟は
  - Märchen らしい言い回しを加える。
  - 子供の好む表現を加える。
  - 話しやすい形にする。

など、読み聞かせ用の本に相応しく、或いは Märchen らしくするといった表層的な改変を行う一方、特に第2版以降は

- 婚前交渉・近親相姦などの要素を除去する。
- 当時の宗教的価値観・道徳観に合った内容にする。

と言うような、内容への本質的な変更（或いは組み替え）を行った。

- “Kinder- und Hausmärchen” は、最初は口承民話を学術的に収集したものであったが、第2版以降は徐々に子供に読み聞かせるための物語集としての色彩を濃くしていった。

## 参考文献

- [1] Jack Zipes. 『グリム兄弟 — 魔法の森から現代の世界へ』. 筑摩書房, 10 1991. 鈴木晶 訳.
- [2] Maria Tatar. 『グリム童話 その隠されたメッセージ』. 新曜社, Jun. 1990. 鈴木晶 ら 訳.
- [3] Walt Disney Company. *Disney archives*. <http://disney.go.com/vault/archives/>.
- [4] KK ベストセラーズ ON LINE. <http://www.kk-best sellers.com/>.
- [5] 山田好司 (編). 『グリム兄弟往復書簡集 — ヤーコブとヴィルヘルムの青年時代』, 第2巻. 本の風景社, Jun. 2003.

---

\*6 現代でもよくある話である。